

令和6年度 自己評価及び学校関係者評価書

令和7年 3月 13日
札幌市立宮の森中学校

1 本年度の経営方針

学校教育目標『自ら立ち ともに生きることを学び 明日を志す生徒』の具現化に迫るために、つなかりに支えられ、挑戦に満ちた学校を目指す。

- 自立 ～ 自らの意思をもち、協働できる力
- 共生 ～ 多様性を尊重し、支え合う力
- 未来志向 ～ 挑戦する意欲をもち、自他ともに伸びようとする力

2 本年度の重点

つなかりと挑戦の視点から教育活動の充実を図る

教育課程パッケージデザインをもとに、各学年の発達段階及び1年の流れ(各学期の重点)を考慮し、相互の関連と試行を重ねながら、より良いものを作り上げる視点で実施と評価を繰り返しながら充実を目指す。

▶つなかり

- ・ 認め合い、支え合い、高め合うつなかりの醸成。
- ・ ユニット学習の原点に立ち返り、方法論ではなくねらいを明確にして実践を重ねる。
- ・ 人と人との異学年交流を継続的に進め、憧れと思いやりの循環を促進する。
- ・ 横のつなかり（仲間・地域・社会）と縦のつなかり（パートナー学級・小中交流・過去未来の自分～キャリアパスポート）をもつ取組を明確化し、ねらいを焦点化して実践する。
- ・ 課題探究型授業の実践による「主体的・対話的で深い学び」の実践の継続と交流を進める。
- ・ 道徳科の充実、ICTを用いた多様な考えの見える化により、安全・平和の基礎を築く。
- ・ ソーシャルスキルトレーニングやコーチング取り入れた活動の推進による豊かなコミュニケーションの向上を図る。

▶挑 戦

- ・ 生徒主体の取組の充実と（多様な）リーダーシップを発揮できる活躍の場を設ける。
- ・ 振り返りとリトライの機会を保証し、その成果を認める。
- ・ 記憶に残る体験と本物に触れる機会の充実を図り、小さな成功体験を積み重ねさせる。
- ・ 作品、成果物などの常設、価値づけを行い、互いの挑戦を認め合う場を意識して設定する。

3 目指す生徒像 ～世界は、自分たちの手で変えることができる～

自立 共生 未来志向	主体性	●自分自身の考えをもち、判断や行動の自己決定をする ●自分自身で目標を設定し、自己実現に向けて行動する ●過去の経験から目的や価値観を再確認し、未来の自分へつなげる
	つなかり	●自分の幸せや興味・関心、好奇心に素直に向き合い大切にする ●感情をコントロールし、言葉による心の通った意思疎通をする ●社会や信頼できる知識・情報と適切につながり、有効に活用する
	挑戦	●挑戦が自己の成長につながる可能性を秘めていることを理解する ●多様な他者の立場で物事を考え、挑戦する他者の勇気を前向きに支える ●建設的な行動や主張をもとに、周囲の課題をより良く解決する

4 自己評価結果に対する学校関係者評価

1) 人間尊重の教育

■学校評価アンケート〔生徒・保護者・教師〕※（ ）内は前年度の数値

参考となる成果指標	生徒	保護者	教師
学校は、生徒たちが「自分が大切にされている」と実感できるような教育活動の充実に取り組んでいる。	86.0 (81.9)	89.2 (89.3)	100 (100)
学校は、生徒の自治的な活動を大切にした教育活動に取り組んでいる。	91.8 (89.1)	92.4 (91.8)	100 (100)
学校は、生徒たちに、「自分を取り巻く世界は自分が動くことでよりよく変わりうることを認識する機会」を作っている。	70.4 (67.0)	79.8 (79.0)	100 (86.4)

■共通指標アンケート

参考となる成果指標	R5 12月	R6 5月	R6 12月
自分にはよいところがある。	86.4	84.4	89.1
人のよいところを見付けようとしている。	91.0	94.1	93.0
自分が必要とされていると感じる。	71.7	73.3	76.3
人の役に立ててうれしいと感じることがある。	92.1	95.2	96.9
人の役に立つ人間になりたいと思う。	92.8	95.6	95.7

生徒像	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	改善の方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
【こながり】	生徒一人一人が「自分が大切にされている」と実感できるような学校づくりを進めているか。	A	年度はじめの4月～5月を「人間尊重の教育」推進のための学校観の共有期間とし、学校長からは「人間尊重の学校づくり」、生徒会役員からは「プラスのまほう」のコンセプトについて全校生徒へ周知する機会を設け、人間尊重の教育についての共通理解を図った。また、教育課程に「学習活動づくり」「人間関係づくり」「安心できる環境づくり」を相互に関連させながら位置付け、子ども一人一人が大切にされていると実感できるような教育活動を系統的に推進することができた。 <u>一方で、教師自らの人間尊重の意識向上に対するアプローチが不足していた。次年度は、教師向けの「人権」に関する研修会や、人間尊重の教育ガイドラインの学習会等を通して、子どもの権利、性に関する指導、多文化共生等の人権課題について、教師が持続的に高い意識を持てるような体制づくりを目指す。</u>	A	A
【主体性】	生徒の自治的な活動を大切にした教育活動に取り組んでいるか。	A	生徒会役員が目安箱の活用を通して、学校生活における問題点や改善点を集約し改善へつなげる流れがより定着した1年となった。 <u>一方で、目安箱への意見の中には、単に自己の欲求を満たすものも散見されるので、子どもたちの意識が「自分だけ」ではなく「学校全体・社会全体の幸せ」に向かうよう働きかけ、将来的には校内改善という視点から、広く社会や世界へと視野を広げ、行動を起こせる人材の育成を目指す。</u>	A	A
学校関係者評価委員による意見			・生徒の主体性を高めるために、生徒に「裁量」をもたせるところに宮の森中の本気を感じる。 ・相互承認の感度を高める働きかけに、教職員、生徒それぞれが意識し取り組もうとする姿勢、生徒に委ねる姿勢がとても良い。 ・生徒会で「プラスのまほう」の説明はしたが、生徒一人一人はそれを達成しているという実感が薄いかもしれない。【生徒会役員】		

2) 小中一貫した教育・家庭や地域とともにある学校づくり

■学校評価アンケート〔生徒・保護者・教師〕※（ ）内は前年度の数値

参考となる成果指標	生徒	保護者	教師
学校は、近隣小学校・家庭・地域とつながりながら、子どもたちの育ちを支えている。	73.5 (75.0)	96.0 (90.1)	100 (100)

生徒像	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	改善の方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
【つながり】	9年間を通した子どもの学びのつながりや、子ども理解の連続性のある教育活動となっているか。小中の教職員の連携・協働がなされているか。	B	中学校教師による夏の出前授業や、中1と小6のコーチングセミナー、中3による小6への学校紹介や不安解消相談会を、盤溪小も含めたパートナー校4校で完全な形で行うことができた。また、3度のパートナー部会を開催し、「学習活動」「生徒会活動」「生徒理解・支援」においてパートナー校同士の連携をより具体的に図ることができた。特に中学校生徒会と小学校児童会が協働して発案した「解き放て！感謝の気持ち」の具現化は、今後の宮の森パートナー校区における「主権者に関する教育」の礎となる実践であった。 <u>今後も、このような子ども主体の実践の地道な積み重ねを、全パートナー校の教師がしっかりと価値づけすると同時に、保護者や地域へもその取組を周知し、学校で大切にしている価値観の共有を図る作業は、次年度設置する学校運営協議会がしっかりと子どもの自治的な活動とつながり、本当の意味で子どもの思いや願いに寄り添うものとして機能するか否かに関わる重要事項であるという認識を広げていく。また、新たな取組として「中高接続」という視点でも何らかの実践のスタートアップを目指したい。</u>	A	A
【つながり】	家庭や地域とつながりながら、生徒の育ちを支えているか。	A	委員制を廃止し、「参加したい時に、参加しやすいPTA」を合言葉に、ボランティアを中心としたPTA活動へ移行して2年目。花壇整備は地域在住のさっぽろタウンガーデナーの方を迎えたり、文化祭バザー収益の使途を生徒会役員生徒と話し合うなど、横のつながりを広げることができた。文化祭では地域展の開催が復活した。参考となる成果指標においては、保護者の肯定的な回答が96%と高い数値を示し、上記のPTA活動の充実化に加え、学校公開日を小中一貫推進プログラムや教科実践発表の日にあわせて実施したことが肯定的な回答の増加につながった。 <u>一方で、子どもたちに対してもPTAや地域とつながりのある教育活動の目的や意義をしっかりと説明し、その価値への理解を深めていく必要がある。</u>	A	A
学校関係者評価委員による意見		・宮の森中が積極的に小中連携の取組をリードしている。今後は連携から一貫につなげる取組をさらに深化させていくことの重要性を感じている。 ・今後、不登校対策、支援を要する子どもへの対応、課題探究的な学習についての小中のつながりの共通理解を深めていきたい。 ・子どもたちの育ちを支えられる地域・家庭・学校のつながり作りにPTAがより貢献できるよう活動し、生徒会との会話の場も増やしていきたい。 ・文化祭バザー収益の使途が「自分たちのため」ではなく「他の人のため」という考え方が聞けたのは良い意味で驚きだった。 ・生徒会と児童会の連携に挑戦したが、次年度は先生を介したやり取りではなく、中学生と小学生の担当者同士が直接やり取りしたい。【生徒会役員】			

3) 学ぶ力の育成

■学校評価アンケート〔生徒・保護者・教師〕※（ ）内は前年度の数値

参考となる成果指標	生徒	保護者	教師
学校は、わかる・できる・楽しい授業づくりの充実に取り組んでいる。	92.2 (89.1)	87.0 (85.8)	100 (100)
学校は生徒が自ら考え、判断し、表現する学習活動の充実に取り組んでいる。	91.1 (89.1)	-	96.3 (100)
学校は、ユニット活動や異学年交流を通じ、認め合ったり、高めあったりする学習活動の充実に取り組んでいる。	89.7 (91.3)	91.9 (91.4)	100 (100)
学校は、学びの質を高めるため、ICT を効果的に活用した学習活動の充実に取り組んでいる。	96.1 (90.6)	90.1 (93.1)	100 (95.5)
学校は、学習評価の仕組みについて事前に説明したり、評価結果について分かりやすく説明したりしている。	92.6 (92.0)	87.9 (88.4)	96.3 (95.5)

■共通指標アンケート

参考となる成果指標	R5 12月	R6 5月	R6 12月
疑問や課題を解決するために、自分で方法を考えるようにしている。	79.9	86.7	88.3
新しく学んだことを、他の学習や生活の場面で使おうとしている。	79.6	83.0	84.4
意見を書くときには、その理由をはっきりさせて書くようにしている。	86.7	87.0	90.3
人の意見を聞いて、それを参考にして自分の考えを見直すことがある。	91.4	92.6	94.9
振り返りを通して、自分の伸びや成長を感じることがある。	71.3	77.4	80.9
振り返ったことを、次に生かそうとしている。	83.5	85.9	87.5
難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦している。	72.0	72.2	74.3

生徒像	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	改善の方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
【主体性】	自ら疑問や課題をもち、主体的に考え、判断し、表現する学習活動の充実に取り組んでいるか。	B	総合的な学習の時間における課題探究プログラムを中心に、子どもが自ら疑問や課題をもち、主体的に解決する学習の充実に努めた。また、主体的に学ぶ力を育む「自由進度学習」に先進的に取り組む石川県加賀市の学校視察とその報告を行った。今後は、 <u>総合的な学習の時間を中核とした教科横断的な学びの系統化と、各教科において、単元ごとに身につけたい力を、未来に生きて働くために必要となる実用的なものとして明確に示すこと（「何を学ぶか」＜「何ができるようになるか」）を通して、学校での学習に実生活や実社会とのつながりが実感できるような場の創出を目指す。</u>	A	A
【挑戦】	ユニット活動や異学年交流を通じ、相互承認や相互啓発のある学習活動を行っているか。	A	各教科における継続的なユニット活動を通し、人と学びあうスキルが、学年が上がるごとに向上した。相互承認の感度の高まりが、困難なことにも挑戦する意欲の向上にポジティブな影響を及ぼしていると考えられる。次年度も、 <u>ユニット活動自体が形骸化しないよう、そのルールや意義を今一度見直して共通理解を図り、各教科や単元の特色を生かしつつも、方向性の一致したユニット活動を目指す。また、異学年交流においては、日常の授業の中での交流の機会を増やし、より多様な他者とつながる場面を創出する。</u>	A	A

【つながり】	学びの質を高めるため、ICT を効果的に活用した学習活動を行っているか。	A	放課後の生徒会活動など、授業以外の日常的な場面での ICT 活用が進んだ。生徒の ICT 活用スキルは世代を追うごとに向上しており、できることも多様化している。 <u>次年度は、特に「分析」「比較」や「共有」のスキルに磨きをかけられるような機会の創出を目指す。また、スクール AI の導入を視野に入れ、学習のスタイルを、従来の一斉型授業から「自分の個人目標と選択をもとに」「多様な内容を」「多様なスペースで」「個別に、時に協働的に」「能動的に」学ぶスタイルへとシフトさせるツールとしての ICT の活用を推進する。</u>	A	A
【主体性】	学習評価の仕組みについて事前に説明したり、評価結果を丁寧に説明したりしているか。	A	全ての教科において、前期・後期というくくりで「学習記録表」を使用し、単元ごとの学習の記録や自己評価の定着をはかることができた。 <u>次年度は、自己評価に対する教科担任によるカウンセリングの充実をはかることで、子どもが自分の伸びに対して主観的にも客観的にも認識を深め、新たな目標に向かって自ら学習をコントロールする力の育成につなげる。</u>	A	A
学校関係者評価委員による意見			・アンケートの数値が前年度比、経年での変化、どちらを見ても向上している項目が多く、これまでの取組の妥当性と成果を感じる。 ・ユニット学習は、小学校でもその土台となる取組を進めたいと思った。 ・生徒が自分の学習を記録、自己評価し、次の学習につなげる取組は良い。 ・地域柄、塾に通う子どもが多い中、学校の先生としては授業の位置付けが難しいこともあるかと思うが、これからも「宮の森中らしい授業」を大切にしていってほしい。 ・2期制移行に伴って、定期テストの回数が減りテスト範囲が増加したという考え方に対して、日常の学習活動やパフォーマンステストによる見取りを大切にし、定期テストや知識偏重の評価脱却という目的を継続的に伝え、理解を得ていくことは大切である。 ・ユニット学習は、意見交流が活発になるというメリットがある反面、よく分かる人が教える手間が増えたり、自分以外の人の面倒を見なければならないという悩みを抱えていたり、メンバー構成によって内容の質に差があったりするという声もいくつか聞くので、より良いユニット学習になるよう、さらに改善の必要がある。【生徒会役員】		

4) 豊かな心の育成

■学校評価アンケート〔生徒・保護者・教師〕※（ ）内は前年度の数値

参考となる成果指標	生徒	保護者	教師
生徒たちは、他者を尊重し、思いやる気持ちを大切にしながら学校生活を送っている。	93.4 (91.7)	96.0 (94.4)	100 (100)
学校は、地域の人や文化的な特色を生かしたり、自然に親しむことができる学習活動の充実に取り組んでいる。	82.9 (81.9)	85.7 (86.7)	92.6 (90.9)
学校は、生徒の不安や悩みに気付く意識を高めるなど、安心して生活できる環境づくりを行っている。	85.6 (80.8)	84.8 (88.4)	100 (90.9)

■共通指標アンケート

参考となる成果指標	R5 12月	R5 5月	R6 12月
自分にはよいところがある。	86.4	84.4	89.1
自分が思っていることや感じていることを人に伝えている。	80.6	75.9	85.2
意見の違う人とも、よく話し合おうとしている。	89.6	87.0	90.3
分からないことがあったときに、友達や先生に聞くようにしている。	81.4	86.3	85.6
学習で困っている友達に声をかけたり一緒に考えたりするようにしている。	78.5	81.9	87.5
家の人や地域の人に認められたり、支えられたりしていると感じることがある。	87.6	86.7	84.8
自分の学びや成長に学校以外の様々な人々が関わっていると感じている。	83.9	87.0	87.2
先生方は、自分が安心して学習に取り組むことができるよう、支援をしてくれる。	91.6	95.9	90.7
先生や家族以外にも、カウンセラーや相談窓口など、必要なときに悩みを相談できる大人がいる。	60.9	67.4	70.0

生徒像	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	改善の方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
【つながり】	認め合い、支え合い、高め合うつながりの醸成を図っているか。	A	学年の枠を超えた生徒会活動、事務職員や用務員、PTA 事務局役員など、学校の運営に関わる方々と子どもたちとの「つながりの機会」の創出など、多様な他者との協働を通して相互に認め支え合うつながりの醸成を図った。また、道徳教育では、担任以外の教師によるローテーション期間の設定や、授業公開を実施した。 <u>次年度は、学年教師による道徳教育のローテーション化の実現を目指す。</u>	A	A
【つながり】	地域の人や文化的な特色を生かしたり、自然に親しむことができる学習活動を行っているか。	A	各教科での地域学習に加え、地域在住のオーロラメッセンジャーの方の出張授業などの継続的な実践を通して、自分自身の成長に地域社会の人々が関わっていると感じられている生徒が多数いる。 <u>次年度も、より豊かな感性を育むために、宮の森地区の人的・地理的・文化的魅力を最大限に生かした教育活動を推進していく。</u>	A	A
【つながり】	子どもの不安や悩みに気付く意識を高めるなど、安心して生活できる環境づくりを行っているか。	A	シャボテンログや、職員室内での情報共有ツールを活用し、子どもの不安や悩みを教師が把握し、いざという時に迅速に対応できるよう意識を高める工夫を行った。 <u>次年度は、SOS の出し方や相談する力を育てる教育を、シャボテンログアプリの効果的な活用とあわせて推進する。また、Ai GROW（気質・コンピテンシー測定ツール）の効果的な活用を通して、その子の強みや魅力など、学力以外の評価軸で教師が子どもと向き合う機会を増やす。</u>	A	A

学校関係者評価委員による意見	・一昔前に比べると、子どもの意識は変化しているように感じており、教師も生徒も「真の多様さの認め合い」が、今後の課題と感じる。 ・シャボテンログは、小中相互の活用の仕方について共通理解を進めたい。 ・「先生や家庭以外で相談できる大人がいる」の指標が少ない点が気になる。先生の存在はかなり肝になるので、少し余裕をもって対応してほしい。 ・SOSを出せる人はまだ良いかも知れないが、もっと深刻に悩んでいて、SOSを出すことすらできない人もいるかもしれないので、その人たちのフォローができるような取組があると良いと思った。【生徒会役員】
----------------	---

5) 健やかな体の育成

■学校評価アンケート〔生徒・保護者・教師〕※（ ）内は前年度の数値

参考となる成果指標	生徒	保護者	教師
学校は、生徒が運動に親しむための環境づくりや指導の工夫に取り組んでいる。	85.2 (91.7)	79.4 (82.4)	96.3 (77.3)
学校は、生徒が自分の健康（心身）を意識し、保持増進につとめようとする力の育成に取り組んでいる。	89.9 (89.1)	82.5 (70.8)	100 (90.9)

■共通指標アンケート

参考となる成果指標	R5 12月	R6 5月	R6 12月
健康診断の結果等から、自分の体の成長や健康状態を知っている。	83.9	91.9	89.9
健康のために、自分には何が必要かを考えて生活しようとしている。	85.8	85.6	86.4
文化、スポーツについて、参加できる環境がある。	89.4	91.8	90.3

生徒像	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	改善の方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
【主体性】	生徒が運動に親しむための環境づくりや指導の工夫に取り組んでいるか。	A	体育の授業では、陸上競技会やスキー学習など、地域の施設を生かしながら運動に親しむ場の創出や、プロの講師によるダンス授業やグループダンス発表会を通して、運動の楽しさに触れられる課題探究的な学習を推進することができた。次年度は、 <u>部活動が子どもたちにとってより望ましい環境となるよう、外部指導者の配置による指導内容の充実等、地域移行を進めていく。</u>	A	A
【挑戦】	生徒が積極的に心身の健康の保持増進を図る資質・能力の育成に取り組んでいるか。	A	健康な生活を送るために、睡眠や食事をはじめとする基本的な生活習慣や運動、手洗い、咳エチケットなどの感染症対策を意識して実践している生徒が多い。また、「保健室来室カード」を活用し、体調不良やケガ等での保健室来室時に、自分のからだの状態を自分で分析し、言語化する力の育成を図った。しかし、 <u>自分の健康問題に気づき、解決に向けて行動できた生徒は多くはない。今後も保健だよりや掲示板の活用、保健室来室の機会や健康相談、保健体育科との連携を通して、一人一人に寄り添った健康問題への支援を充実させていく。また、外部講師による「命の授業」も、学年の実態に即した内容、かつ系統立てた内容にアップデートしていく。</u>	A	A
学校関係者評価委員による意見			・ダンスやスキー等、外部講師を有効に活用しておりすばらしい。 ・部活動を通しての学校とのつながりが、地域の人とのやりがいや生きがいにもつながる良い機会となるかもしれない。部活動外部指導者の配置については、課題はあるかも知れないが、円滑な移行に期待する。 ・現代社会では、年を重ねる毎に健康に関わる問題が出てくる。普段から話し合ったり、正確な情報、正しい知識を得ることが大切である。		

6) 子どもの発達への支援・信頼される学校の創造・教科等の枠を越えた教育

■学校評価アンケート〔生徒・保護者・教師〕※（ ）内は前年度の数値

参考となる成果指標	生徒	保護者	教師
学校は、生徒一人一人にあった学習支援を充実させている。	82.1 (80.8)	68.6 (72.1)	96.3 (81.8)
学校は、校舎内の清掃や整頓がよくなされ、災害や交通に対する安全意識を高める指導の工夫に取り組んでいる。	90.3 (89.9)	92.4 (93.6)	100 (86.4)
学校は、生徒の興味・関心を理解し、将来の生き方や働き方について考える進路探究学習の充実に取り組んでいる。	90.3 (89.9)	80.7 (85.0)	92.6 (100)
学校は、生徒の作品やレポートなどを展示したり、課題探究の成果などを表現する場や機会を提供している。	96.1 (93.8)	95.1 (95.7)	100 (100)

■共通指標アンケート

参考となる成果指標	R5 12月	R6 5月	R6 12月
先生方は、自分が安心して学習に取り組むことができるよう、支援をしてくれる。	91.6	95.9	90.7
自分が学ぶ場所は、ケガをしったり事故が起きたりしないよう、安全が守られている。	91.0	95.2	91.4

生徒像	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	改善の方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
【つながり】	特別な配慮を要する生徒一人一人の教育的ニーズに応じた特別支援教育となっているか。	B	学力の優劣や発達障害の有無にかかわらず、すべての子どもが楽しく・わかり・できるよう、工夫・配慮された授業（授業のユニバーサルデザイン）をテーマに校内研修会を実施したり、前期の学習評価から、個別の支援が必要な子どものサポートファイルを作成し、具体的な支援の充実を図った。また、不登校生徒の居場所づくりとして、心の教室の整備を進めた。 <u>次年度は、「学びの支援委員会」を計画的に運営し、教科担任、学級担任、学びのサポーター、保護者間の情報共有を密にしながら、特別な配慮を要する生徒への具体的・合理的な支援の実現を目指す。</u>	A	A
【主体性】	校舎内の清掃や整頓がよくなされ、災害や交通に対する安全意識を高める指導の工夫に取り組んでいるか。	A	年に3回の避難訓練のうち、1度を「不審者対応」として実施した。また、PTAとも連携し、冬季における通学路の安全確保に努めた。校内の衛生・環境整備については、用務員のきめ細かな清掃に加え、保体委員会による清掃強化日の設定など、学校全体として校内の美化・衛生を保とうとする意識は高い。 <u>今後も、本校の大切な伝統・文化として引き継いでいく。</u>	A	A
【主体性】	自分の興味・関心を理解し、将来の生き方や働き方について考える進路探究学習の充実を図っているか。	A	1・2学年では、進路学活において「自己認識ワークシート」に取り組む中で、「自分の未来をつくるキーワード」を導き出したり、2・3学年の総合の時間では、将来の生き方や働き方について考えを深めていく学習活動を通して、中学生として、今大切にすべきことについてまとめ、交流した。 <u>次年度は、総合的な学習の時間と、各教科の年間学習計画とを関連付け、横断的な学習の充実を図る。また、校外でボランティア活動に参加する生徒の増加に向けての取組を探る。</u>	A	A

学校関係者評価委員による意見	・ユニバーサルデザインの考え方は、授業でもその他の活動でも今後ますます重視していかなければならないことであり、校内で研修されたことはとても良い。 ・生徒一人ひとりに合った学習支援の充実に関する参考指標で、保護者の数値が低いのが気になった。授業参観などに来られない保護者もあり、学校の取組をもっと知ってもらえると数値も高まるかもしれない。 ・実際に災害が起きた場合、この地域は深刻な被害につながる可能性もある。CS を活用した避難訓練なども視野に入れていく必要を感じる。 ・緊急時には、周囲に関心を持ち続けると同時に、自分の身を自分で守る安全意識を大切にしてほしい。 ・生徒会でもボランティア活動を取り入れていることに感心した。 ・特別支援学級の5組の生徒が、お昼の放送でアナウンスに挑戦するなどの関わりの機会もあるが、お互いの交流の機会をもっとたくさん設けられると良い。【生徒会役員】
-----------------------	---